

競技に対する認知がキャリアパターンに及ぼす影響について

中村 文紀 栗木 一博

キーワード： 結果予期 有能感 勝敗に対する態度

The influence of cognitive attitudes toward career pattern

Fuminori Nakamura Kazuhiro Awaki

Abstract

The purpose of this study was to clarify the psychological factors to differentiate sports career patterns at the critical time when athletes select the kind of sports he/she participates, such as in elementary school, junior high school, senior high school, college, and community club or professional career, from the point of changes in his/her outcome expectation and self-efficacy. Also, analysis was made in team sports and individual sports from the points of outcome anticipation and self-efficacy.

Questionnaires were administered to 292 college students (males 160 and females 132) enrolled at a college of physical education and sport. Contents of the questionnaire were 15 items on outcome anticipation, 9 on self-efficacy in sports, and 15 on attitude toward win/loss. Subjects were asked to indicate the period of each sports they participated from 3 years old through college years.

From the study, it was found that both outcome anticipation and self-efficacy showed differences between persons who continued one sports only (one-sports type) and persons who continued several sports but having changed their sports more than once (compound-sports type). Therefore, it became clear that both psychological factors could differentiate the one-sports type from the compound-sports type.

In this study, following suggestions were derived; (1) in team sports, performances of a team could affect the individual's outcome anticipation and self-efficacy and, in turn, have an influence on his/her continuation and/or change in sports participation. (2) individual sports, as it directly related to the development of his/her ability in sports skills, individual records could affect on his/her self-efficacy and, in turn, influence his/her continuation and/or change in sports participation.

Key words : sports career outcome anticipation self-efficacy adherence

I. スポーツキャリアパターン研究の背景

Bandure(1977)は、行動を説明する理論的モデルとして Self-efficacy Model 提唱している。これは、運動行動のみならず、効力感を媒介として、一般的な行動の開始と維持を説明するためのモデルである。Weinberg et al.(1981)、Desharnais et al.(1987)、Ewart et al.(1983)、Kaplan et al.(1984)、Dzewaltowski(1989)らによって、このモデルが運動療法における運動行動を説明できることが検証されている。また、最近では加賀ら(1993)によって、中高年者の運動行動についても説明できることが検証されている。以上のように、このモデルは、現在のところ、運動行動を説明する有力な理論であると考えられる。

Self-efficacy Model では、人間が行動を起こす先行条件として結果予期と効力予期という二つの認知を想定されている。結果予期とは、自分がその行動を実行した場合どのような結果が得られるかという予想である。これに対し効力予期とは、自分がその行動をどの程度効果的に実行できると思っているかという自信であり、自己効力感とも言われている。

筒井(1996)は、結果予期と運動に対する有能感という心理学的要因によって、青少年のスポーツ参加者と不参加者を区別するだけでなく、一度始めたのに離脱していく者や再び参加する者をも区別することができるかを検討することを目的として研究を行った。この研究では、心理学的要因として先に説明した Self-efficacy Model の結果予期と効力予期を取り上げている。効力予期については、祐宗ら(1985)の研究から有能感とはほぼ同じ意味を持っていることから、効力予期に変えて運動に対する有能感を使用している。勝敗というのは、スポーツにおける基本的特徴であり、スポーツ行動を研究するなら、触れざるを得ない観点だと考えている。スポーツ参加には、スポーツの勝敗に対する態度が重要な心理的要因であるという指摘もなされており、岡崎ら(1981)、石井(1984)、賀川(1993)などの研究から、運動部所属経験があり、対外試合の経験を多く持つ選手、勝った経験の多い選手、また、厳しい練習を多く経験した選手がより高い競技的志向性を示すことが報告されている。このことから、筒井ら(1996)は、勝敗に対する態度もスポーツキャリアパターンを区別する心理的要因と考え、取り上げている。

この研究で用いられている質問項目は、加賀ら(1993)の研究を基に作成した。結果予期 13 項目と運動に対する有能感 9 項目、そして、勝敗に対する態度 15 項目からなる質問項目を用いている。それぞれの質問項目を「非常にそう思う」(4 点)から「全くそう思わない」(1 点)の 4 段階で評定させている。スポーツキャリアパターン

は、スポーツ少年団、スポーツ教室、スポーツクラブ、学校の運動部など、体育授業外に定期的に行ってきたスポーツ種目名を小学校、中学校、高校、大学について 2 種目まで回答させている。この結果、スポーツキャリアパターンは、小中高大の各段階にわたる種目への参加状況の変化から、52 のパターンが認められ、それを 5 つの型にまとめた。

結果予期は、不参加型が他のすべての型よりも得点が低く、同一種目型と異種目継続型は、離脱型より高い得点になった。運動に対する有能感は、同一種目継続型と異種目継続型が、他のすべての型よりも得点が高かった。そして、中断復帰型と離脱型は不参加型よりも得点が高く、不参加型は他のすべての型よりも得点が低かった。結果予期には中断復帰型と離脱型の間に差がなく、運動に対する有能感には中断復帰型と離脱型の間に差が認められたことから、運動に対する有能感がスポーツキャリアパターンと密接な関係があることが示された。しかし、この研究では、スポーツ参加者と不参加者を比較するために新しい種目を始めた場合の結果予期を聞かざるを得なかったため、結果予期、運動に対する有能感は、同一種目継続型と異種目継続型の差を明らかにすることができなかった。そのため、同一種目継続型と異種目継続型を区別すると考えられる心理学的要因を明らかにすることができなかった。

II. 研究目的

本研究は、競技者が種目を選択する機会(小学校、中学校、高校、大学の部活動やスポーツ少年団、クラブチームなど)の結果予期と運動に対する有能感の変化から、筒井(1996)の研究で明らかにすることができなかったスポーツキャリアパターンを区別する心理学的要因を明らかにすることを目的とした。これまでスポーツを専門的に行ってきたと考えられる体育系大学の学生を研究対象とすることで、多様な種目への関わりなど、特殊な分類が行えると予測した。また、競技の系統別に、競技者が種目を選択する機会(小学校、中学校、高校、大学の部活動やスポーツ少年団、クラブチームなど)の結果予期と運動に対する有能感の変化から団体種目と個人種目の分析を行った。団体種目は、競技者の競技能力や競技成績だけが影響するのではなく、所属しているチームや団体の競技成績が影響することが考えられる。個人種目では、競技者自身の競技能力が大会の成績やその競技の記録などに影響してくることが考えられる。よって、団体種目と個人種目では、結果予期と運動に対する有能感という心理的要因が、競技継続に与える影響が異なることが考えられる。そこで、団体種目を球技系、個人種目を対人競技の武道系と記録競技の記録系の 3 つに分割し

検討を行った。

Ⅲ. 研究方法

1) 調査対象

体育系大学の S 大学学生、男子 160 名、女子 132 名、計 292 名。

2) 調査時期

平成 17 年 7 月上旬

3) 調査方法

筒井 (1996) が加賀ら (1993) の研究を基に作成した、質問項目を引用して質問紙調査を実施し、大学講義中に記入方法の説明を行い、回答を回収した。

4) 質問内容

(1) 結果予期

加賀ら (1993) の研究に基づき、筒井 (1996) が選んだ「上手になれる」「体力がつく」「あきてしまう」「何の役にもたない」などの質問項目 13 項目を、「非常にそう思う」(4 点) から「全くそう思わない」(1 点) の 4 段階で評定させた。

(2) 運動に対する有能感

先行研究 (加賀ら, 1993) に基づき、筒井 (1996) が作成した「体力はある」「健康には自信がある」「運動は得意」「すぐにうまくなる」などの質問項目、9 項目で回答を求めた。それぞれの項目を 4 段階で回答を求めた。

(3) 勝敗に対する態度について

「勝つことに意味がある」「勝ってこそ喜びがある」「純粋に楽しむものだ」「努力することに意味がある」など、これまで石井ら (1984, 1987) が研究してきた勝敗に対する考え方を含み、勝敗に対する態度の質問 15 項目を用いて、それぞれ 4 段階で評定させた。

Ⅳ. 結果と考察

1) スポーツキャリアパターン

今回の研究は、体育系大学の学生を対象としているため、筒井 (1996) が分類した 5 つのキャリアパターンのうち、離脱型、不参加型の該当者がいなかった。パターンの分類の際に 292 名中、78 名が記入不足、または記入ミスのため使用したデータは計 214 名分であった。

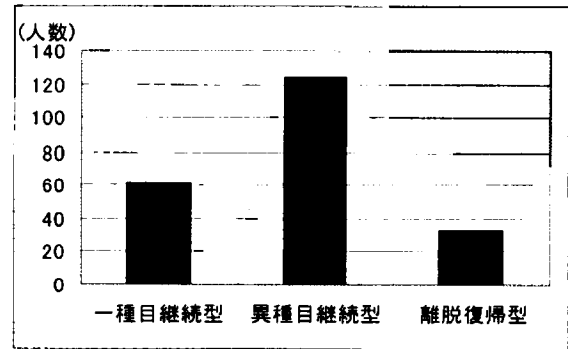


図 2. スポーツキャリアパターン別の人数

一種目継続型は 61 名、異種目継続型は 124 名、離脱復帰型は 33 名となった。

2) キャリアパターンの結果予期

結果予期 13 項目の評定を合計し、得点が高いほどスポーツを行うことによって肯定的な結果が得られるという考えの傾向が強いことを示している。

図 6 は一種目継続型、図 7 は異種目継続型、図 8 は離脱復帰型の競技者の種目を選択する機会の回数における結果予期待点と年齢の平均値と標準偏差の変化を表した図である。図の見かたは、◆マークは左から順に 1～5 回種目を選択する機会があったことを示している。横軸は、競技を行っていた年齢を示し、縦軸は結果予期待点の値を示している。

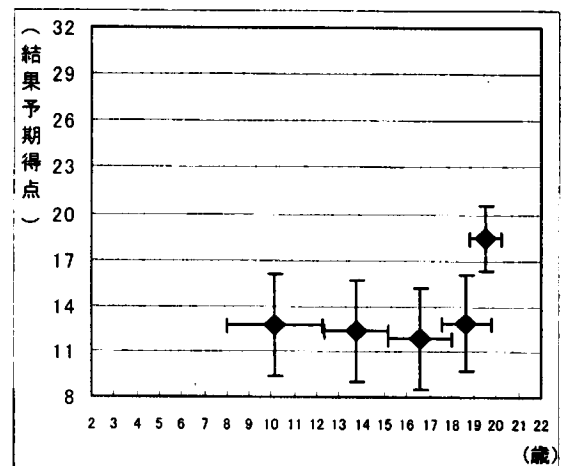


図 6. 一種目継続型

一種目継続型は、競技成績が低いときに得点が下がり、逆に競技成績が高いときに得点上がる傾向を示した。

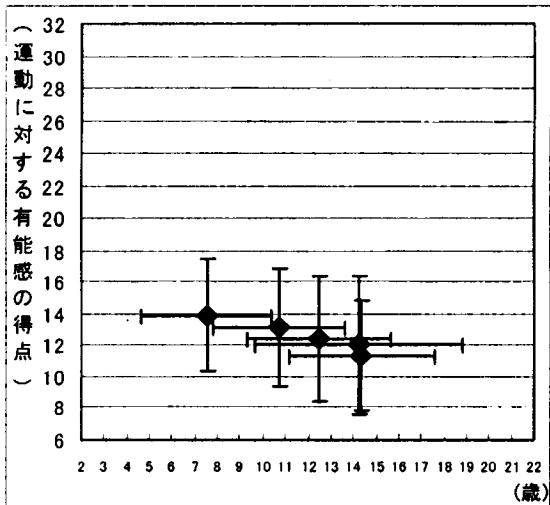


図 7. 異種目継続型

異種目継続型は、競技成績の変化に関わらず競技者が種目を選択する機会の回数が増えることに、肯定的結果予期得点が低くなることが示された。

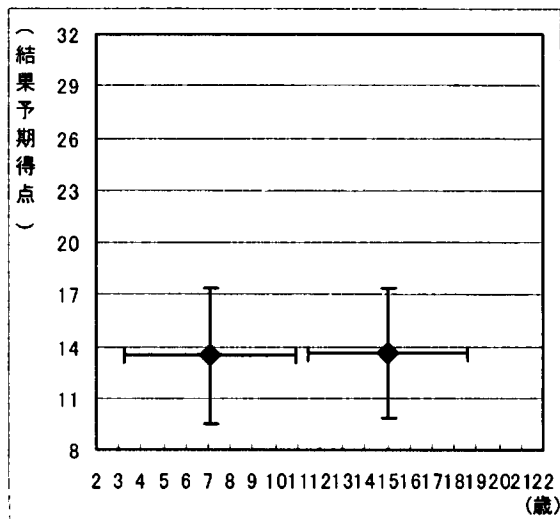


図 8. 離脱復帰型

離脱復帰型は、離脱する前の競技と復帰した後の競技が、同種目の場合も異種目の場合も含めた結果を示しており、離脱前、復帰後の2回の種目選択機会とした。競技を離脱する前と復帰した後の結果予期得点の差は、あまり変化がないという傾向を示した。

以上のことから、結果予期には一種目継続型と異種目継続型の間に差があることを示され、一種目継続型と異種目継続型を区別することができた。よって、結果予期という心理的要因が一種目継続型と異種目継続型を区別することができることを明らかにすることができた。

3) キャリアパターンの運動に対する有能感

結果予期と同様に、運動に対する有能感9項目の評定

を合計し、得点が高いほど運動に対する有能感が高いことを意味している。

図9は一種目継続型、図10は異種目継続型、図11は離脱復帰型の競技者の種目を選択する機会の回数における運動に対する有能感の得点と年齢の平均値と標準偏差の変化を表した図である。図の見かたは、◆マークは左から順に1～5回種目を選択する機会があったことを示している。横軸は、競技を行っていた年齢を示し、縦軸は有能感の得点の値を示している。

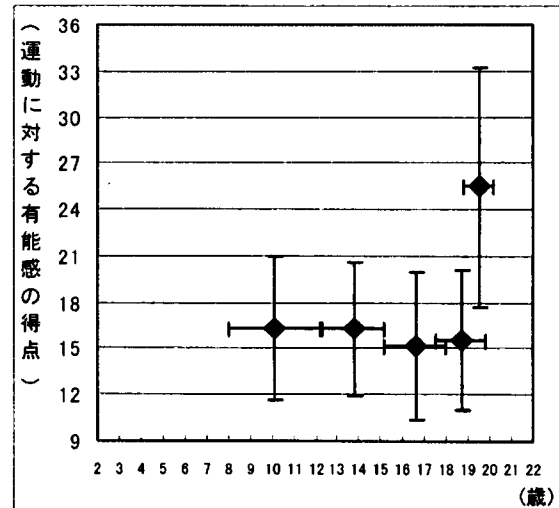


図 9. 一種目継続型

運動に対する有能感の一種目継続型は、競技者の競技成績が低いときに有能感が下がり、逆に競技成績が高いときに有能感が上がることが示された。

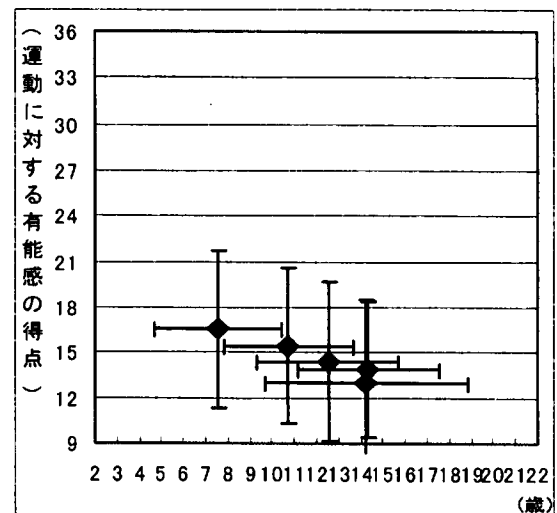


図 10. 異種目継続型

異種目継続型は、競技者が種目を変更した後の競技で、種目を変更する前の競技成績よりも高い成績を出したとしても、競技者が種目を選択する機会の回数が増えるこ

とに、有能感が低くなることが示された。

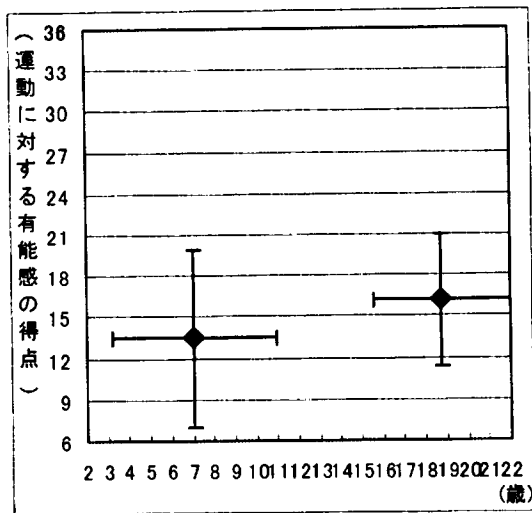


図 11. 離脱復帰型

離脱する前の競技と復帰した後の競技が、同種目の場合も異種目の場合も含めた結果を示している。競技を離脱する前と復帰した後の運動に対する有能感の得点は、復帰した後の得点が高くなっていることが示された。

以上のことから、運動に対する有能感には一種目継続型と異種目継続型の間に差があることを示され、一種目継続型と異種目継続型を区別することができた。よって、運動に対する有能感という心理的要因が一種目継続型と異種目継続型を区別することができることを明らかにすることができた。

4) キャリアパターンの勝敗に対する態度

勝敗に対する態度 15 項目のうち、スポーツにおいて勝つことを重視するといった内容の 6 項目を『勝利志向性』とし、評定の合計が高いほど、その傾向が強いことを意味している。また、スポーツは楽しむことを重視するといった内容の 5 項目を『レクリエーション志向性』とし、評定の合計が高いほど、スポーツは楽しむことと考える傾向が強いことを意味している。

一種目継続型は、競技成績が低いときに勝利志向性の得点が下がり、競技成績が高いときに得点が高くなる変化を示した。また、体育系大学に入学する時期に勝つことを重視する勝利志向性の得点が高くなる変化を示した。勝利志向性の得点とレクリエーション志向性は、その高低がまったく逆の傾向を示した。このことから、一種目継続型の者の勝敗に対する態度は、大会の成績が競技者の勝利志向性、レクリエーション志向性に影響を与えることが明らかになった。

異種目継続型は、勝利志向性、レクリエーション志向性ともに、種目を変更する前、種目を変更した後の競技

成績に関係なく得点が下がっていくことが示された。このことから異種目継続型の者の勝敗に対する態度は、競技者の競技成績が勝利志向性、レクリエーション志向性に影響を与えるのではなく、競技者の種目変更が勝利志向性、レクリエーション志向性に影響を与える傾向があるものと推察される。

離脱復帰型は、勝利志向性、レクリエーション志向性ともに、離脱前の得点より復帰後の得点の方が低くなる変化を示した。離脱前の種目より復帰後の種目で高い競技成績を出している者が多いにも関わらず得点が低くなっている。このことから離脱復帰型の者の勝敗に対する態度は、競技者の競技成績が勝利志向性、レクリエーション志向性に影響を与えるのではなく、競技者の離脱が勝利志向性、レクリエーション志向性に影響を与える傾向が見られた。

5) 系統別の結果予測

団体種目選手と個人種目選手の競技に対しての違いを明らかにするため、球技系、武道系、記録系に分け、種目ごとに競技者が種目を選択する機会（小学校、中学校、高校、大学の部活動やスポーツ少年団、クラブチームなど）の結果予測得点の年齢による変化について分析を行った。

図 12 は球技系、図 13 は武道系、図 14 は記録系の競技者の種目を選択する機会の回数における結果予測の得点と年齢の平均値と標準偏差の変化を表した図である。図の見かたは、◆マークは左から順に 1～4 回種目を選択する機会があったことを示している。横軸は、競技を行っていた年齢を示し、縦軸は結果予測の得点の値を示している。

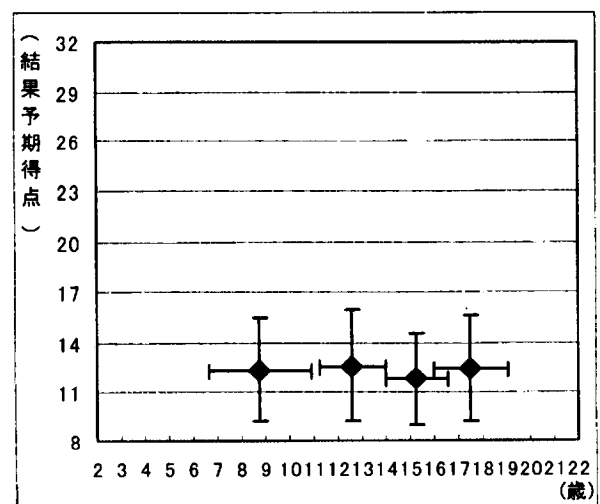


図 12. 球技系

団体種目である球技系は、所属しているチームや団体

の競技成績が低くなるときに、結果予期の得点が低くなり、成績が高くなると逆にこれらの得点が高くなる変化を示した。

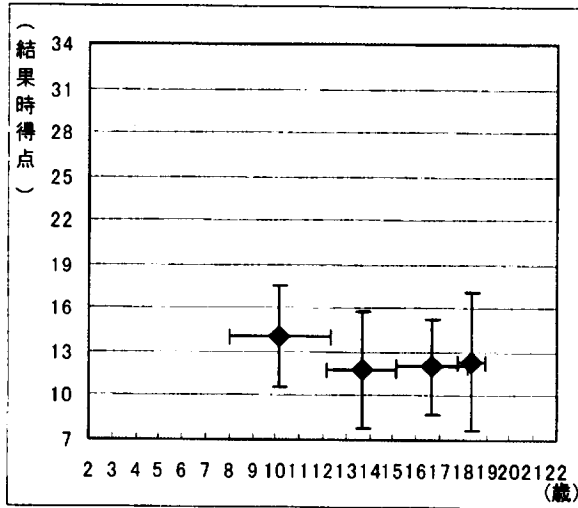


図 13. 武道系

個人種目の対人競技である武道系は、競技者自身の競技能力と対戦者の競技能力が大会の成績に影響する。武道系は、大会の成績が低いときに結果予期の得点が低くなり、大会の成績が高くなると得点が高くなる変化を示した。

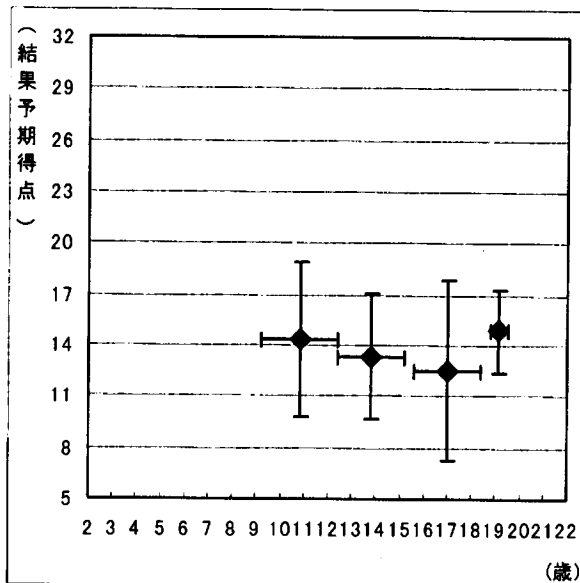


図 14. 記録系

個人種目の記録競技である記録系は、競技者の競技能力が競技成績に大きな影響を及ぼすことが考えられる。記録系は、競技者の記録が悪くなるとときに結果予期の得点が下がり、競技者の記録が良くなったときに結果予期

の得点が上がる変化を示した。

6) 系統別の運動に対する有能感

図 15 は球技系、図 16 は武道系、図 17 は記録系の競技者の種目を選択する機会の回数における運動に対する有能感の得点と年齢の平均値と標準偏差の変化を表した図である。図の見かたは、◆マークは左から順に 1～4 回種目を選択する機会があったことを示している。横軸は、競技を行っていた年齢を示し、縦軸は運動に対する有能感の得点の値を示している。

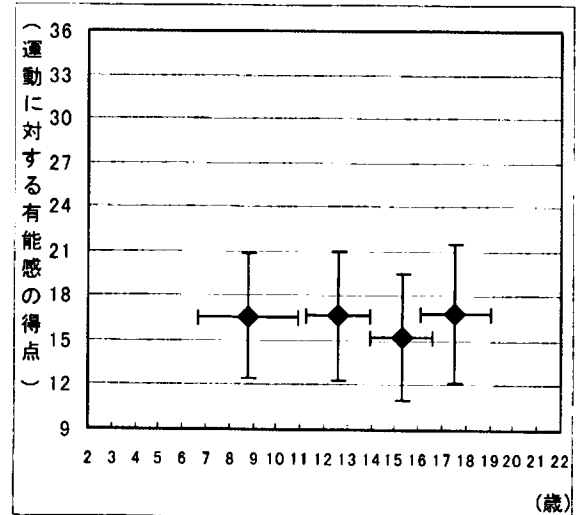


図 15. 球技系

団体種目である球技系は、結果予期同様に所属しているチームや団体の競技成績が低くなるときに、運動に対する有能感の得点が低くなり、成績が高くなると逆にこれらの得点が高くなる変化を示した。

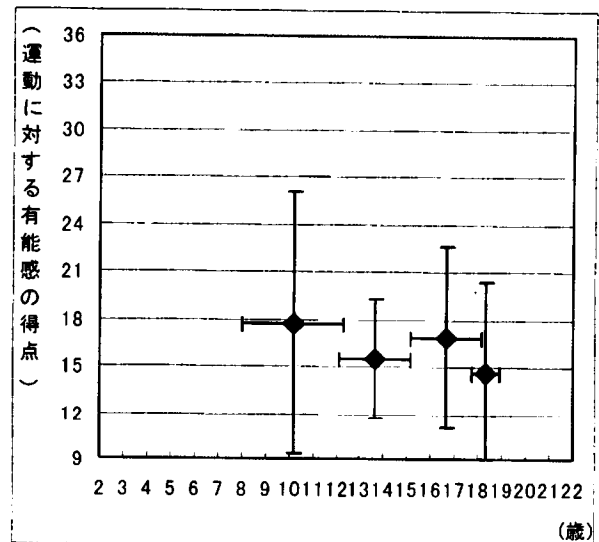


図 16. 武道系

武道系は結果予期と同様に、大会の成績が低いときに運動に対する有能感の得点が低くなり、大会の成績が高くなると得点が高くなる変化を示した。

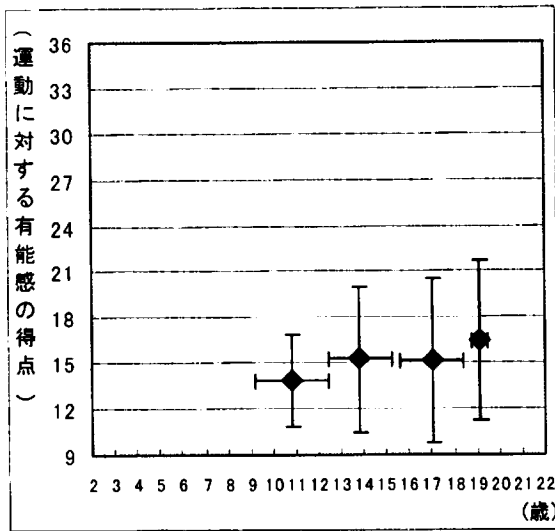


図 17. 記録系

記録系の運動に対する有能感は、競技者の競技記録が得点の変化に影響を与えるのではなく、競技を継続した年数が長くなることに運動に対する有能感を高めていく傾向を示した。

以上のことから、団体種目は、競技者の競技能力や競技成績が結果予期や運動に対する有能感に影響を与えるのではなく、所属しているチームや団体の大会成績が、球技系競技者の結果予期、運動に対する有能感に影響を与えることが推察される。

個人種目は団体種目とは異なり、競技者自身の競技記録が結果予期に影響を与えていることが考えられる。また、競技者が能力を向上させることが直接記録を伸ばすことに結びつくという性質が、競技者の運動に対する有能感に影響を与えることが推察される。

V. 総括

本研究は、競技者が種目を選択する機会（小学校、中学校、高校、大学の部活動やスポーツ少年団、クラブチームなど）の結果予期と運動に対する有能感の変化からスポーツキャリアパターンを区別する心理学的要因を明らかにできるか検討をした。

・結果予期

一種目継続型と異種目継続型の間の結果予期待点の変化には差があることを示され、一種目継続型と異種目継続型を区別することができた。離脱復帰型は、離脱する前も復帰した後も肯定的な結果を予期していないことが

示された。

団体種目は、所属しているチームや団体の大会成績が、球技系競技者の結果予期に影響を与え、個人種目は競技者自身の競技記録が結果予期に影響を与えていることが推察される。

・運動に対する有能感

一種目継続型と異種目継続型の間の運動に対する有能感には差があることが示され、一種目継続型と異種目継続型を区別することができた。離脱復帰型は、競技を離脱する前と復帰した後の運動に対する有能感の得点は、復帰した後の得点が高くなっており、離脱前の種目より復帰後の種目の方が有能感を持っていることが示された。

団体種目は、所属しているチームや団体の大会成績が、球技系競技者の運動に対する有能感に影響を与え、個人種目は競技者が能力を向上させることが直接記録を伸ばすことに結びつくという性質が、競技者の運動に対する有能感に影響を与えることが推察される。

・勝敗に対する態度

一種目継続型は、勝利志向性の得点とレクリエーション志向性の得点の高低がまったく逆の傾向を示したことから、大会の成績が競技者の勝利志向性、レクリエーション志向性に影響を与えることが明らかになった。

異種目継続型は、競技者の競技成績が勝利志向性、レクリエーション志向性に影響を与えるのではなく、競技者の種目変更が勝利志向性、レクリエーション志向性に影響を与える傾向があるものと推察される。

離脱復帰型は、競技者の競技成績が勝利志向性、レクリエーション志向性に影響を与えるのではなく、競技者の離脱が勝利志向性、レクリエーション志向性に影響を与える傾向があるものと推察される。

VI. 参考文献

- 1) 海老原 修 (1988) 組織的スポーツからのドロップアウトに関する研究. 体育・スポーツ社会学研究 7: 107-129.
- 2) 加賀秀夫・石井源信・嘉戸 修・菊 幸一・杉原 隆・長見 真・深見和男・宮内孝知・雨宮輝也 (1992) 中高年のスポーツ参加に関する社会的・心理学的研究-第1報-. 平成3年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告.
- 3) 加賀秀夫・石井源信・嘉戸 修・菊 幸一・杉原 隆・長見 真・深見和男・宮内孝知・雨宮輝也 (1993) 中高年のスポーツ参加に関する社会的・心理学的研究-第2報-. 平成4年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告.

- 4) 松尾哲也・多々納秀夫・大谷善博・山本教人 (1994)
ボランティア・スポーツ指導者のドロップアウトに
関する社会学的研究：指導への過度没頭と生活支障
の関連及びその規定要因について.
- 5) 岡崎祥訓・石井源信・賀川昌明・米川直樹・(1981)
スポーツマンシップに対する態度の研究－大学女子
における態度形成要因について－. 体育の科学 31:
362-365.
- 6) 高井和夫・中込四郎 (2003) 中高年者の健康運動
キャリアパターンと心理的要因の関連性：筑波大学
体育科学系紀要 26：87-97,2003.
- 7) 筒井清次郎・杉原 隆・加賀秀夫・石井源信・深見
和男・杉山哲司 (1996) スポーツキャリアパターン
を規定する心理学的要因：Self-efficacy Model を中
心に. 体育学研究 40：359 - 370).
- 8) 山本教人 (1990) 大学運動部への参加動機に関する
正選手と補欠選手の比較：体育学研究, 35:109-
119.
- 9) 横田匡俊 (2002) 運動活動の継続及び中途退部にみ
る参加動機とバーンアウトスケールの変動：体育学
研究 47:427-437.
(伊藤隆一・千田茂博・渡辺明彦 2003 現代の心理
学. 金子書房 5：69 - 80